

## 保育者養成課程学生のムシに対する好悪について

野 尻 裕 子\*・今 井 邦 枝\*\*・栗 原 泰 子\*\*\*

### About Insects Like and Dislikes Feeling in the Student of the Those Who Take Care of a Child Training School

Yuko NOJIRI, Kunie IMAI, Yasuko KURIHARA

#### 要 旨

生き物とかかわることの多い保育現場で、その経験は子どもにとって命の尊さや不思議さにふれる格好の機会となる。現在子どもたちの育つ環境に危機感を持つ教育・保育の関係者の中でも、このような経験は特に重視されている。そこで本研究では将来保育者を志望する学生が、子ども時代にどのような昆虫とかかわる経験をしてきたのか、また現在昆虫に対してどのような受け止め方をしているのかを調査し、今後の養成課程での課題を知る手がかりを得ようと考えた。

その結果、幼少期に遊んだ昆虫の数、好きな昆虫の数、嫌いな昆虫の数においては、学生の性別との関連性は認められなかった。しかし幼少期に遊んだ昆虫の種類の一部に性別との関連性が示唆され、男子学生は力強さをイメージするもの、女子は可愛らしさをイメージする昆虫を取り上げていた。また女子学生は男子学生よりも、現在好きな昆虫がいない傾向が強く、嫌いな昆虫の中でも特に「蛾」との関連性が強くあらわれていた。また女子学生が昆虫を嫌いだとする理由は、男子学生よりも自らの経験から生まれた感情面で捉える傾向にあることがわかった。これらの結果から、学生自身の経験と性別による経験差を考慮した養成が必要であることが明らかになった。

キーワード：保育者養成課程、昆虫、好悪、性別、幼少期の経験

---

\*准教授 幼児教育学

\*\*准教授 幼児教育学

\*\*\*教 授 幼児教育学

## 1. はじめに

保育現場では子ども達は一年を通して虫とかかわる生活を送っている。特にこの時期に生き物とのかかわりなどを通してのちについて学ぶ機会を得ることは、現代の子どもにとって重要な意味をもつ。このことは平成に入ってから幼稚園教育要領や保育所保育指針の度重なる改定においても、常に視野に入れて考えられてきたことでもある。平成 19 年に実施された小学校、中学校対象の全国調査によれば、生き物と触れ合う生活経験は学校教育段階があがるごとに減少傾向にあった<sup>(1)</sup>。

このような現状の中で、保育者を志望する学生の中には、実習中子どもから捕まえた虫を渡されそうになったり、一緒に捕まえようと誘われて困ったといった経験を持つものが多い。しかし、調査（2006）の結果、全体の 6 割近い学生が昆虫を嫌いだと感じていた<sup>(2)</sup>。ただしその後の 2007 年の調査では、学生は幼少期には何らかの昆虫と飼育や自由なふれあいの中でかかわり遊んでいたことがわかった。更にこうした学生のうち、大人になってから昆虫が嫌いになったという回答が 8 割以上の学生からえられた<sup>(3)</sup>。昆虫に対する好悪の感情、特に嫌いだとする思いは、結果的にそのものとの接触や観察の機会から遠ざかることになる。本研究では、好悪の感情がどのようにして作られていったものなのかを、幼少期の昆虫とのかかわりの経験と現在の好悪の感情との関係からみていこうと考えた。そして本研究を通して、これから保育者として子どもと様々な生き物とかかわりながら経験を共にするためには、養成段階で学生にどのような学習が必要となるのか考える手がかりとしたい。

## 2. 目 的

保育者養成課程学生の昆虫に対する好悪の感情と過去の昆虫とのかかわりの経験、及び性別との関係を明らかにする。

## 3. 方 法

4 年制保育者養成課程に在籍する大学生に対し、幼少期における昆虫と遊んだ経験および現在の昆虫に対する好悪の感情についてアンケート調査を実施した。

- 調査期間     2007 年
- 調査対象     286 名（女子学生：210 名，男子学生：76 名）

●調査内容

- ①子どもの頃に遊んだことのある昆虫名
- ②好きな昆虫名・嫌いな昆虫名とその理由
- ③大きくなってから嫌いになった場合、その理由の自己分析

これらの内容について、昆虫名は回答数に限定をかけず、また理由に関しては自由記述で思い出し記録の方法を用いて記入を求めた。

#### 4. 結果及び考察

本調査では昆虫名で回答を求めたが、回答結果の中にへびなど昆虫に属さないものも含まれていた。そこで本研究では昆虫として学生が捉えて回答したものを調査結果として取り扱うこととしたため、広い意味で用いられる「ムシ」とし、分析を行うこととした。

##### (1) 子どもの頃に遊んだ昆虫について

子どもの頃に遊んだ昆虫として、回答された昆虫は約 17 種類、総数は 1,087 件であった。また平均回答数は女子 3.9 件、男子 3.6 件であった。

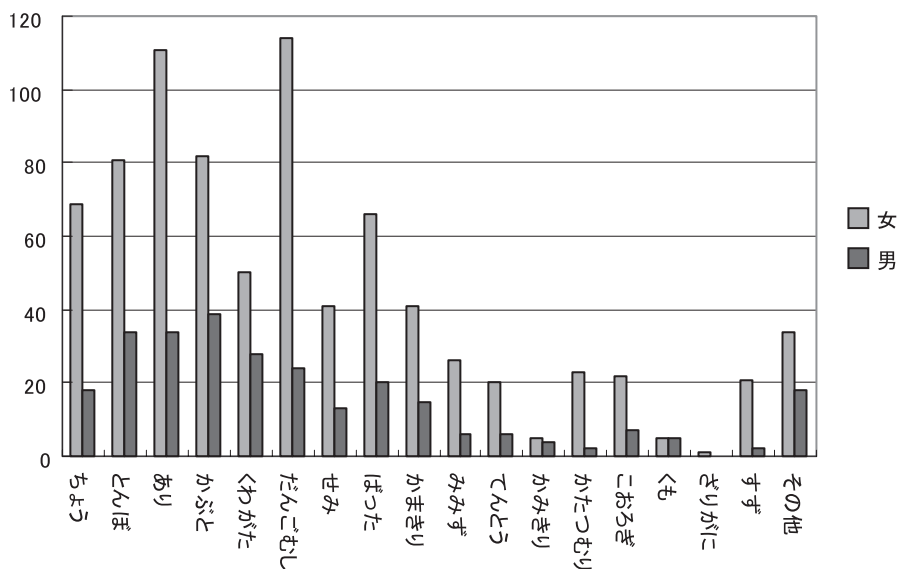


図1 遊んだ昆虫

結果を昆虫別に見てみると図1のような結果になった。女子は「ダンゴムシ」「アリ」「カブトムシ」「トンボ」, 男子は「カブトムシ」「トンボ」「アリ」「トンボ」の順に回答が多くあった。しかし T 検定の結果, 回答された昆虫の数の平均値と性別の間には, 有意な差は見られなかった。また虫の種類と性別にはクワガタ, ダンゴムシ, カタツムリ, スズムシといった一部の昆虫に関連性が見られた。クワガタは男子が子どもの頃遊んだ昆虫として, 回答する傾向が高かった。男子のクワガタと比べて, 女子で関連性があるという結果の出たこれらの昆虫は, 日常生活環境の中で非常に身近なものであるという特徴がある。また男子のクワガタとは対照的に, 女子との関連性があると考えられる昆虫は, 童謡などにも歌われる比較的可愛いものであるといえる。

## (2) 現在好きな昆虫について

好きな昆虫として回答された昆虫は約 11 種類, 総数は 443 件で, 平均回答数は女子 1.5 件, 男子 1.7 件であった。

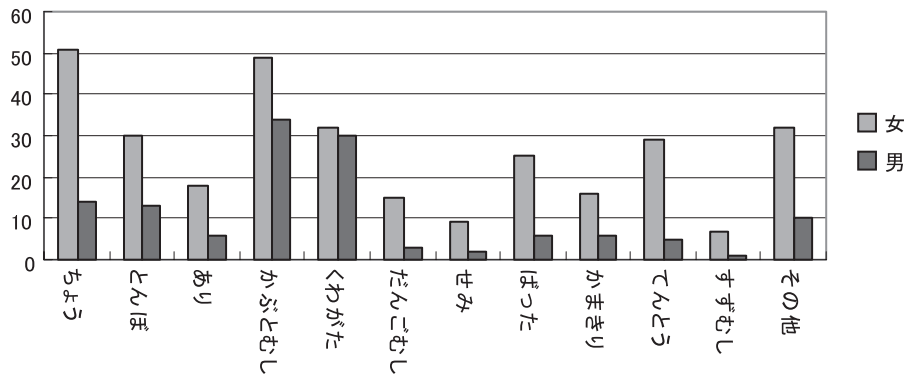


図2 好きな昆虫

好きな昆虫の種類は, 男女ともに「ちょう」「カブトムシ」「クワガタ」が上位を占めていた。しかし T 検定の結果, 回答された昆虫数の平均値と性別の間には有意差は認められなかった。さらに好きな昆虫の回答が得られなかった人がいたことから, 分析を行った結果, 好きな昆虫がないことと性別の間に有意差があり, 女子は男子よりも好きな昆虫がない傾向にあった。また, カブトムシ, クワガタといった昆虫に関しては, 性別との間に関連性があると思われるものがあり, 女子よりも男子に好まれる昆虫と考えられる。カブトムシ, クワガタといった鞘翅

目（甲虫目）の昆虫は、文字通り兜のような硬い皮膚をもち、黒光りをし、またほかの昆虫と比べ力強さを感じる。これらの昆虫に対し、特に男子学生が今も肯定的感情を持っているといえる。

更に現在好きな昆虫がいない人の中で、子どもの頃に遊んだ昆虫の種類と性別の関係を分析した結果、関連性が示唆されたものがあった。それは女子学生の回答に見られたカブトムシ、クワガタ、セミ、バッタで、子ども時代を象徴するようなこれらの昆虫と遊んだ記憶のある女子学生は、現在好きな昆虫がいないという結果になった。このことと、先述した子どもの頃に遊んだ昆虫と性別に関連性が見られた昆虫（ダンゴムシ、カタツムリ、スズムシ）を比較してみると、その特徴が見えてくる。つまり、一般的に幼少期において代表的といわれる、いわゆる昆虫採集の対象である虫（カブトムシ、クワガタなど）の思い出しか持たない女子学生は、成長する中で昆虫に対する積極的且つ肯定的な感情が薄れるのではないかと考えられる。

### (3-1) 現在嫌いな昆虫について

嫌いな昆虫として回答されたものは、約 15 種類、総数は 337 件で、平均回答数は女子 1.2 件、男子 1.0 件であった。

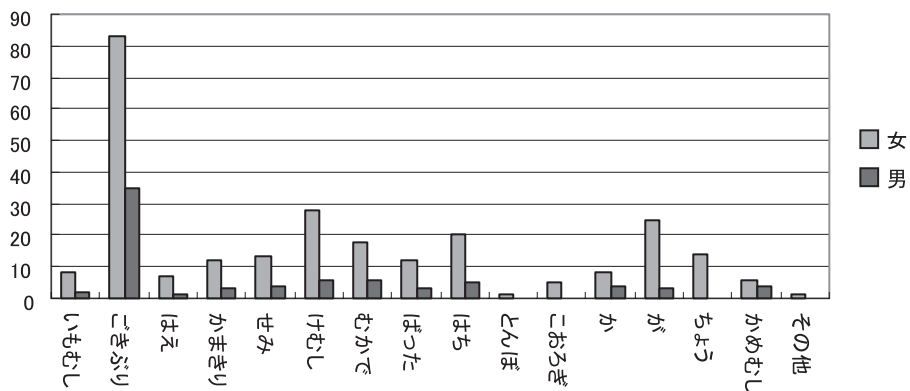


図3 嫌いな昆虫

嫌いな昆虫として挙げられたのは、男女とも「ゴキブリ」が群を抜いている。また女子は「ケムシ」「ガ」「ハチ」といった昆虫が続いてあげられていた。しかし男子は他に目立って多くあげられたものがなかった。

また嫌いな昆虫がない人は、男女とも 5%弱で少なかった。しかしこれらを検定した結果、

嫌いな昆虫として回答された昆虫数の平均値と性別の関連性は認められなかった。つまり嫌いな昆虫がないことと性別との関連性は、今回の調査ではデータ数が少ないため検討するに足る資料とならなかった。

しかし嫌いな昆虫の種類と性別には、一部の昆虫に関連性が認められ、「ガ」「チョウ」は女子学生において嫌いな昆虫として取り上げられる傾向が高い可能性が認められた。特に形態の類似性の高いこの二つの昆虫に性別との関連性が認められた。幼児期に可愛らしい、美しいものとして、また女兒の描く絵の中で頻繁に登場する華麗なイメージの昆虫は女子学生においては人気が高いと思われたが、現在ではその捉えられ方が変化していることがわかる。「チョウ」は現在好きな昆虫としてもあげられていたが、特に「ガ」は女子において嫌いな昆虫として非常に高い関連性が見られたことから、より現実の生き物としてつぶさに観察したとき、その形態に嫌悪感を覚えるようになったのではないだろうか。また嫌いな昆虫がないことと、子どもの頃に遊んだ昆虫の種類の関係を検討したところ、関連性は認められなかった。

### (3-2) 嫌いな理由

嫌いな理由としてあげられた内容を、これまでの研究結果より、昆虫それ自体をあらわす「形態」「動き」と学生本人が経験の中で自身の内面に形成したであろう「悪いイメージ」「恐怖感」の4つに分類した。その結果、男女とも「悪いイメージ」「形態」といった内容の回答が多かった。

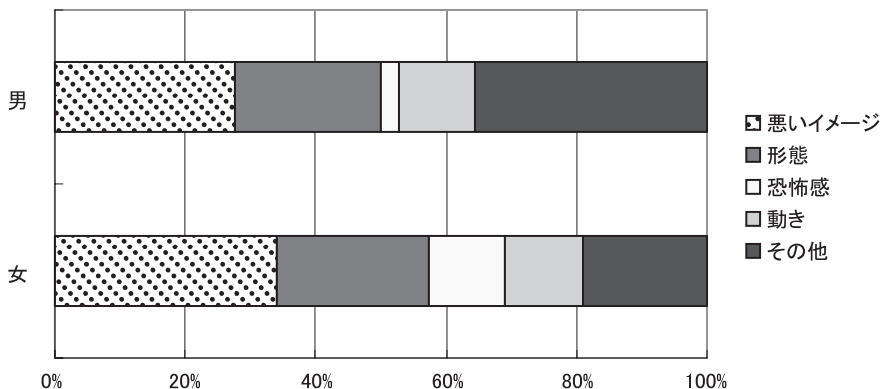


図4 嫌いな理由（男女比率）

この結果を性別との関連で分析すると、「悪いイメージ」と「恐怖感」何れも女子学生において有意差が見られた。このことから、女子学生は男子学生よりも嫌いな理由が、自分自身の経験の中で根付いた感情による傾向が高いといえる。

#### (4) 昆虫に対する嫌悪感についての自己分析

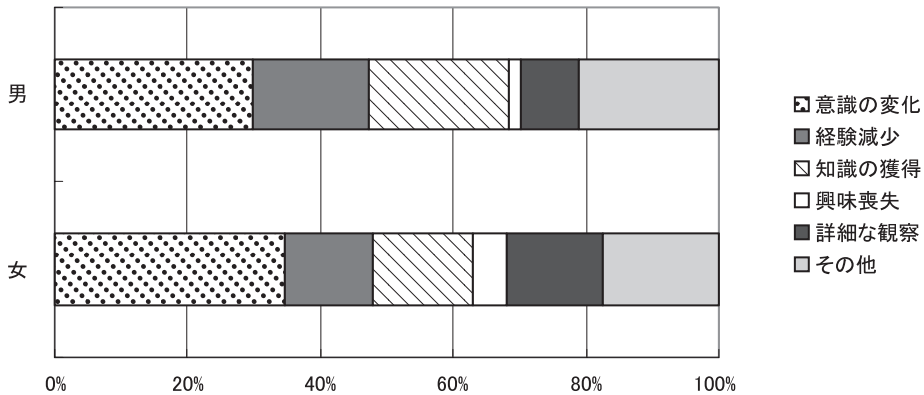


図5 自己分析（男女比率）

大人になってその昆虫が嫌いになった理由としてあげられた内容を、以下の5つに分類した。

「1. 意識の変化」は小さい頃は関心があったが、昆虫に対する意識（面白い、可愛い）が変わってしまったなどの理由であった。また「2. 経験減少」は成長に伴い、接触経験の減少のため特に好きな感情が失われてしまったというものである。「3. 知識の獲得」は学習などにより知識を得る中で、不思議さ、面白さなどが失われ積極的に関わる気持ちがなくなっていったというものである。「4. 興味喪失」は（他にもいろいろな遊びをおぼえるうちに）なんとなく関心がなくなっていった。「5. 詳細な観察」は詳細に観察するうちに、気持ち悪さをおぼえるようになったという回答であった。

回答結果をこれらに分類した結果、男女とも「意識の変化」「知識の獲得」が多いという結果であった。しかし、それに続く理由に男女の違いが見られ、女子は「詳細な観察」、男子は「経験減少」があげられていた。このことから女子は男子よりも昆虫の細部にわたる観察を通して、実態を知ることにより昆虫に対する嫌悪感を抱くようになっている可能性があると考えられる。また男子学生の場合、「経験減少」の占める割合が女子よりも多いことから、接触する機会の減少によって苦手意識を持つようになったのではないだろうか。しかしこれらを検定

した結果、有意な差は認められなかった。

## 5. まとめ

以上のような結果から、「保育者養成課程学生のムシに関する経験と意識の特徴」は次のとおりである。

①遊んだ昆虫として意識されていたものは男女とも平均で3種類から4種類で、昆虫数と性別との関連はみられない。しかし昆虫の種類により、一部、性別との関連性が確認されたものがあった。

②現在好きな昆虫としてあげられた数は男女とも平均2種類未満で、昆虫数と性別との関連はみられない。

しかし好きな昆虫がいないことと性別との間に関連性があった。

③嫌いな昆虫としてあげられた数は男女とも平均1種類程度で、性別との関連はみられなかった。また嫌いな昆虫がいないことと性別の関連性もなかった。

しかし嫌いな昆虫の種類と性別には、一部関連が認められたものがあった。

④嫌いな理由の中で、「悪いイメージ」と「恐怖感」において、性別との関連があった。

保育者の感性は大切な保育環境であり、子ども達に影響を及ぼす。前回の幼稚園教育要領改訂（1998）であげられた「教師の多様な役割」が示すように、教師は様々な場面でモデルとして存在している。今回の調査で昆虫と遊んだ経験の中であげられた昆虫数や、好きな昆虫の数をみると、決して保育者として豊かな経験を示すものとは言い難いものがある。しかしだからといって、学生に対して昆虫と関わる機会を増やすといった手段のみを講じるのはどうだろうか。それよりも、今後養成段階においては、保育現場で様々な虫とかかわりながら活動を展開している子ども達の様子を一層積極的、具体的に伝え、幼児理解を深めるなかでの取り組みと捉えることのほうが大切ではないだろうか。その際、今回の分析結果を参考に、性別や経験差を捉えていくことも必要だろう。

今後の課題としては、今回嫌悪感の回答結果を分析する際、嫌いになっていった直接的な「原因」（知識を獲得したから・詳細な観察をしたから）、とその「結果」（興味がなくなっていった・意識が変わっていった）を同列にカテゴリーとして使用したが、これに関しては今後検討していく必要があるだろう。



## 引用文献

- (1) 国立教育政策研究所, 「平成 19 年度全国学力・学習状況調査」, 2007
- (2) 栗原泰子・野尻裕子・細井香・鈴木絵理子, 「保育者養成学生の動物との関わりについて—動物への対応と幼児への援助について—」, 『日本乳幼児教育学会第 16 回大会発表論文集』, 2006, PP60-61
- (3) 栗原泰子・野尻裕子・細井香・江島絵理子, 「保育者養成学生の昆虫に対する嫌悪感の形成について」, 『日本乳幼児教育学会第 17 回大会発表論文集』, 2007, PP116-117

## 参考文献

- 文部科学省, 「幼稚園教育要領」, 1998  
文部科学省, 「幼稚園教育要領」, 2008  
厚生労働省, 「保育所保育指針」, 2008